

イムシフトという奴が起きたのだ。その前の西洋では、言葉や着ているものは違っても、人間は結局みな同じという思想が優越していた。それが、体のサイズや目鼻立ちや生育する風土等によって、本質的に相異なる人種が居るという発想に置き換わった。そこでの最重要指標は、やはりいちばん分かりやすい肌の色。白色人種と黄色人種と黒色人種という絶対的概念が生まれた。植物図鑑を編纂することが、人が人を見る目まで変えたのである。

すると十八世紀以前には、肌の色の違いはどう理解されていたのか。少なくとも西洋人は、より白いか、より黒いかという程度の、相対観念でしか考えていなかったようだ。日本語でも、あかは明るい、くろは暗い、あおは淡いに、由来するという。要するに色の説明はグラデーシオンに尽きていた。それと同じだ。

十六世紀から十七世紀にかけて来日した西洋人たちは、マルコ・ポーロ同様、日本人の肌の色をしばしば白、ないし白に近いと表現していた。黄色に類する言葉はあまり使われなない。そもそも肌の色の違いで人間を計る発想に乏しかった。ならば何で計っていたのか。礼儀作法、倫理道徳、社会制度、科学技術などだ。文明か野蛮かは肌の色とは関係ない。問題は中身である。宣教師たちには、織田信長や徳川家康、いやいや、日本の庶民階級も、西洋人並みの文明人に見えていた。見かけではなく、振る舞いや暮らし方を評価していた。人間一般についての一元的・普遍的尺度が存在していたと言っただけ。

それが変わってゆく。アジアに来る西洋人が、日本人に近い白さの肌のスペイン人やポルトガル人から、もっと白い肌のオランダ人やイギリス人に変わったことも大きかったか



明石書店
7700円(税込)

もしれない。彼らは植物学をはじめとする近代科学を発達させただけではなない。自分たちの白さをもアジアで再認識した。白いか否かと文明の高低を結びつけようとした。日本人を白に近いのではなく、はっきり黄色に分類し直した。ここで、黄色人種なる概念の確立に影響を与えたり、種が、白さの際立つ北欧人であることを、改めて思い出してもよい。

本書は実は予告されたシリーズの第一部に過ぎない。全五部作になるのだとか。西洋世界での日本人イメージ史を現代まで書き尽くそうというのだ。人種民族を強く意識するイスラエルの学者ならではの切り口が光る。完結を期待する。

ロテム・コーネル著
滝川義人訳

白から黄色へ

肌の色はいかにして「人間の尺度」になったか
ヨーロッパ人の人種思想から見た「日本人」の発見

片山杜秀

イスラエルの碩学による驚異の日本研究だ。より正確に言えば、西洋が日本人をどうイメージしたか、その変遷史である。微に入り細を穿つ。徹底ぶりに脱帽だ。

まずは書名に注目！『白から黄色へ』。白人から黄色い日本人へのメ

ッセージなのか。全く違う。歴史を遡れば、日本人は初め西洋に白人として紹介されていたのだ。もちろん名譽白人なんて話ではない。マルコ・ポーロは『東方見聞録』に、ジパングには白い肌の人間が住むと書いている。だからと言って、日本人が中国人や

モンゴル人のような黄色人種とは別種と想像されたわけでもない。そもそも黄色人種という観念は、西洋が十八世紀に発明したと、本書は説く。決定的役割を果たしたのは近代植物学の発展だ。特にスウェーデンのリンネである。彼は植物学者として知られるが、そこから進んで森羅万象の分類学を志した。たとえば人間も、植物のように種によって分類できるのではないか。リンネの名著『自然の体系』をきっかけに、そういう考え方が急激に広がった。パラダ

文藝春秋
BOOK
倶楽部

BUNSHUN
BOOK CLUB

書評委員 (五十音順)

池上彰 (ジャーナリスト)
角田光代 (作家)
角幡唯介 (探検家・作家)
梯久美子 (ノンフィクション作家)
片山杜秀 (慶應義塾大学教授)
佐久間文子 (文芸ジャーナリスト)
出口治明 (立命館アジア太平洋大学学長)
中島岳志 (東京工業大学教授)
原田マハ (作家)
平松洋子 (エッセイスト)
古市憲寿 (社会学者)
本郷恵子 (東京大学史料編纂所教授)

4名の方が交代で執筆します